

藤戸の古戦場を訪ねて

奥坊 一広

「倉敷つて白壁の土蔵が残る『美観地区』で知られているけれど、ずっと以前は海の中だったのよ」。

数年前に倉敷を訪れた際、御園旅館の今井麻紀子さんから、そう教えられた。倉敷、といえば「美観地区」のイメージが強かっただけに、すぐさま「倉敷＝海の中」には結びつかなかったが「今でも児島 早島、連島、乙島といった地名が多いでしょう。これは昔、島だったものが山や丘になった名残なのよ」と言うことだった。

倉敷市の説明にも「倉敷は今から約400年前までは阿知潟と呼ばれる浅い海で、遠く中国山地から流れ出てきた土砂が蓄積し、干拓により点在した島々が陸続きになりました。高梁川の河口では次々と新田

開発が進み、温暖な気候米作農耕に適し、川を伝つての舟運による備中米や綿、菜種など商品作物の集散港となりました。江戸時代には、幕府領7万石を支配する代官所が置かれ、産業の中心地として繁栄しました」と書かれている。

この繁栄の名残を残す倉敷川畔一帯を倉敷市は1969年、「美観地区」として指定。79年には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

ということ、今年は観光地として「倉敷・美観地区」が世に出て37年。「確かに倉敷＝美観地区もいいのだけれど、もつとこの地域には古い歴史があることも知ってもらいたくて」と言う今井さんと、今井さんと筆者の共通の友人であるコピ



佐々木盛綱の銅像

ーライターの森茂さんに従つて、海の中だった頃の倉敷周辺を訪ねることになった。

海の中だった倉敷の旅は「源平合戦」の時代へ。いっきに800年以上前にさかのぼる。源平合戦といつても「水島の合戦」、「下津井沖合戦」、「塩干の合戦」、「藤戸の合戦」などがあるが、今回は「藤戸の合戦」ゆかりの地に限定した。「藤戸の合戦」とは、1184年に倉敷市の藤戸地区で行われ、屋島の戦いの前哨戦と言われる。源氏が勝ったがその際、源氏の武将、佐々木盛綱が馬で海を渡り先陣を切り、勝利に導いたこと

その「藤戸寺」は行基が開山した古刹で天平年間には塔頭12坊12院に及ぶ末寺を抱えるほど栄えたそうだが、源平の時代には荒れ果てていて、盛綱によって戦没者の供養と合



浮き州岩跡



藤戸寺



経ヶ島

【参考文献】ホームページ「藤戸合戦の古戦場をたずねて」
<http://djv.libnet.pref.okayama.jp>
ホームページ「源平合戦と帯江」
<http://www1.harenet.ne.jp/~sugi/obie/genpei1.htm>
ホームページ「藤戸」
<http://www.kanze.com/nonotayori/fujito.htm>

筆者自身も「佐々木憎けりや笹まで憎い」というフレーズは、どこことにはなしに覚えているぐらいだから。盛綱は漁師を死に追いやったりといえ、「藤戸の合戦」の翌年、戦勝の功で児島郡の領主となったり、「藤戸寺」で漁師の追福と源平両軍で亡くなった人たちの霊を慰めるための大法要を行って、そのとき行った写経を埋めた「経ヶ島」には漁師の供養塔が残っている。領主としても善政を行ったようで、いつてみれば盛綱が根っからの悪人として伝承されていないことも、この合戦が人々の心に残るものになっっているような気がする。

わけて復興されたという。毎年梅雨時期には「平家物語」の冒頭に出てくる「沙と呼ばれるナツツバキが真っ白な花を咲かせる。全国でも珍しい鎌倉前期様式の石造りの五重塔もある。」
「経ヶ島」は「藤戸寺」の川向こうにあり、そこに架かる「盛綱橋」は1989年に新しくなったもので、盛綱が馬で海を渡る勇ましい姿の銅像が設置されている。
今回は時間の関係で、倉敷川沿いの史跡しか回ることができなかったが、盛綱が出陣前に戦勝を祈願した「御崎(おんざき)神社」や「源氏本

陣跡」がある法輪寺、盛綱が海を渡る途中で浅瀬に鞭をつきさした「鞭木」、上陸の地「先陣庵」、平家本陣のあった「かがり地蔵」など、藤戸の合戦に関する史跡は倉敷に点在しているほか、「水島の合戦」など他の合戦を入れるとかなりの数になる。
「源平合戦で活躍する有名な武将はあまり登場しないけど、海の中だった頃の倉敷の観光もいいでしょ」と最後にまわった藤戸寺の前で話す今井さんを見ていて、見えないものを見ようとすることで見えてくるのが、「倉敷の海の中だった頃の観光、かな」と思ったりした。



上: 出し岩



右: 笹無山

で知られる。さて森さんの車に乗り込み、御園旅館を出発。倉敷川にほぼ平行する倉敷玉野線を走る。「今、こうして見ている景色が源平の頃には道や平地が海の中で小高い山や丘が島だったなんて、不思議ですね。普段は何も考えずに走っている道が、見方ひとつでまったく違った景色になってくる」と森さん。
5分ほど走り最初に着いたのは、小山の下にひっそりとある「乗り出し岩」。山の上には住宅地が広がっていて、今は源平の古戦場ゆかりの地には思えないが、このあたりの高坪山一帯に源氏が陣を敷いた、とき

れる。500メートルほどの海峡をはさんだ児島に陣を構えていた平家に、舟のない源氏は攻めようがなく平家にあざ笑われたという。
そこで佐々木盛綱は地元の漁師の若者に対岸まで渡れる浅瀬を聞き出し、部下を連れて海を渡り、平家を打ち破るきっかけをつくった。「乗り出し岩」は馬にまたがった盛綱がここから海に入り、海中を押し渡って平家の陣に一番乗りを果たした重要な場所になる。
「藤戸の合戦は、浅瀬を渡ることができなければ源氏が勝ったかどうかわからないというわけやねえ」と筆者が今井さんに言うと、「そうなんだけど、浅瀬を教えた若者を盛綱は殺しちゃうのよ。秘密を他に教えられたら困ると思っただけ。」
息子を殺されたことを知った母親は「佐々木憎けりや笹まで憎い」と盛綱を恨み、山の笹をすべてむし

ってしまい、その後笹が生えなくなってしまうと言われるが、今も「笹無山」と呼ばれる地が残っている。「笹無山」は「乗り出し岩」から道路沿いに走った近くにある。今では笹が何事もなかったかのように自生しているのが印象的だった。
このエピソードを元にして、室町時代に世阿弥は謡曲「藤戸」をつくった。能を見て感激した足利義満は殺された漁師が流れついたという「浮き州岩」を都へ運ばせ、その後、能好きだった豊臣秀吉が聚楽第の庭に置き、京都・醍醐寺三宝院に移したと言われている。調べてみると、確かに三寶院の庭園には現在も浮き州岩が置かれてある。昭和44年には有吉佐和子作の義太夫「藤戸の浦」が東京国立劇場でも公演され、好評を得たという。
盛綱が海を渡って源氏を勝利に導いたという話よりも、世阿弥や有吉佐和子といった人たちによって、息子を思う母親の愛情、悲しみを能や義太夫で表現されてきたことが「藤戸の合戦」を後世に長く語り継がせる役割を果たしてきたように思える。